今泉 洋

いまいずみ・ひろし：武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科教授。アスキー社ニューヨーク駐在員、インプレスA&D社エクゼクティブ・プロデューサー、文化科学研究所客員研究員などを経て、2000年より現職。

シュメール人からもらった21世紀春の夢

「俯瞰」は突飛な妄想をもたらすこともある。だが妄想とて未来の扉を開くカギの1つに違いない。

先月のこのコラムでは、昨今話題のいわゆる「ITの革命性」について思うところを書いた。その際、つい「グーテンベルクの呪縛からの解放」などと大げさな表現をしたが、もし本当に「グーテンベルクの呪縛」から逃れようと思うなら、さらに歴史をさかのぼって分岐の可能性を探ってみなければならない。成り行きを考えると「メディアと文字」の関係にとどまらず「発話行為と文字システム（＋メディア）」の組み合わせに目を向ける必要がある。というわけで、にわかに歴史のお勉強をしてみたのだが、いろいろと興味深い事柄が見えてきた。

簡単にまとめると、史上最古の文字体系はシュメール人の発明した楔形文字だと言われている。だがそれ以前にも、記号としての文字は家畜や穀物の量を記録する目的で利用されていたと言う。

その文字は、粘土板上に物量を記録するための目印程度のものであった。しかし社会の広がりとともに、次第に詳細な記録が求められるようになる。ヒトの行動など抽象的なコトの記述ができるよう、より精緻な言語性獲得へ向けて文字世界のシステム化作業が行われていく。

この段階で「発話」という行為と「文字」という仕組みをいかにすり合わせるかという大問題が発生する。ヒトの意思表現のうち、音声表現に注目して一連の音の変化を要素に分解し、発音要素と記号とを対応させるテーブルを作る。発音と無関係に意味と記号を結び付けるのではなく、実際の音と視覚的記号を対応させ、これを利用して意味表現を行う法則を作り出すのである。

表意文字群と表音文字群の合体による新しい文字システムの構築……シュメール人は、まったく白紙の状態からこれに取り組んだ。紀元前3000年ごろのできごとだったという。

ところで、ヒトの発話のようすは十人十色、また同じ人物でも気分や力点などによって大小やトーン、ピッチなどが変わってくる。だが、文字への表記ではひたすら万人に認識できる音声パターンに注目し、分節化と視覚的記号化を行うわけで、こうしたバリエーションは無視するしかない。その結果、一連の音の連続的なつながりが持つ意味合い、このコラムで注目してきたマルチモーダルな側面は文字システムの構築当初から捨てられてしまった。

その後しばらくの間、記録媒体は粘土板や石版、記録作法は手彫りや手書きというプリミティブなメディアと技術の組み合わせが続く。文字システムの利用者は限られ、用途も経済的影響力の大きなものに集中していた。だが、羊皮紙や紙の出現、さらにペンや活版印刷の登場を迎えても、メディアは貴重な情報・知識を記録する立場に留まり続ける。リテラシーがある程度の普及を見せた後も、協創的な作業はもっぱら対面的な環境下の口頭で行われる。そしてその間に、書物の大量複製・大量生産が推し進められ、活字と紙の組み合わせによる巨大なメディアの帝国ができあがっていった。

こうして迎えた20世紀末に登場したのが、デジタル技術である。

さまざまな表現を量子化することで自由な操作を可能にするデジタル技術は、これまでの文明を形づくってきた表現とメディアの関係を組み替えてしまう可能性を秘めている。

結果を記録するだけではなく、意識の発現を断片的に外在化させ、それらを操作することのできる「意識の鏡」のような場、たとえばPC上のウィンドウとマウスのセットはその原始的な様式だが、こうした一時的に意識を外在化させるメディアの普及は、有史以来人類が初めて到達したメディアの高みと言っても過言ではない。この技術を、従来どおり情報や知識の記録処理能力向上へ奉仕させるのか、それともそのダイナミックな特性を新たな協創的コミュニケーションに向けて発展させるべきか。私たちはまさにそこを問われているのだと思う。

記録のための仕組みとしては、紙をベースとするメディア、従来の文字システムの延長上に構築されつつあるデジタル情報メディアの優位性は、当分の間揺るぎそうもない。

かつてのシュメール人が、いま私たちが手にしているメディアを目前にしたならどのように考えるだろう。マルチモーダルな意志のふるまいを新たなメディア環境の中に取り込むことを考えるに違いない。そして新たな表記法を備えたパーソナルな思考の場を作り上げ、これらをネットワークで結び、世界的な規模で発話の非同期的交流、協創的思考のための仕組みを実現していくのではないか。

この春休み、コミュニケーションの歴史を眺めながら、そんな妄想を膨らませてしまった。

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

［インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ］ ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D（株式会社インプレスから分割）が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D（当時は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先
株式会社インプレスR&D
All-in-One INTERNET magazine 編集部
im-info@impress.co.jp

Copyright © 1994-2007 Impress R&D, an Impress Group company. All rights reserved.